



だから、背伸びしよう

前号にはクラスの保護者会で伝えたことをまとめておいたが、星陵会館で行われた全体会での話はどのようなものだったのかというと、まあ保護者向けということで「経済」面での話がメインになっていたが、その話の根底に流れていたことは、

- 大学選びが、その後の生涯と大きく結びつく可能性がある（仲間から広がる、伝統という太いパイプから広がる、など）ということであり、
- 今が最も苦しい時期ではあるが、だからこそがんばりドコロである。自分を貫き「行きたい」という強い意志を持続する。ということであったと思う。

*

ここのところ模試受験の機会も増え、それにともなってその結果が返却されてくる機会も増えてきた。受けに行けば問題が解けないし、その結果が返却されれば悲惨な結果…となれば、気持ちが揺れない方がおかしいのである。だから、そういう時には揺れるに任せるしかない。

が、揺れに揺れ、右に左にと大きく揺さぶられても、結局は同じ場所、真ん中に戻ってくるものなのである。

君たちは浪人形（笑）ではないのだから、模試は「出来ない」でナンボなのである。繰り返して強調しているように、出来た模試など何の意味もない。極論すれば、判定が「A」の模試ほど（受験準備という観点からは）ムダなものはないわけだし、今の段階で「A」判定が出ている大学など、目指すに値しないということになるのである。

だから、今のうちにたくさん「E」を集め

て、その徹底的な復習（復讐？）を通して、最後の最後に逆転すればいい（E）のである。それこそが、現役生にとって最高の受験パターンとなる。だからこそ、今が頑張りドコロということになるわけだ。

*

……とはいっても気持ちは揺れる。それは、君たちには「選択の自由」があるからだ。「自由」がどれほど大変なものか、このことから十分に分かるに違いない。

例えば、歌舞伎の家に生まれれば、おそらく歌舞伎の道を継いで行くことにならざるを得ないだろう。そう極端でなくとも、例えば家が代々続いている医者だったりすれば、やはり自ずと進路は決められてしまうに違いない。そういう家庭に育てば、本人も医者になるのが当たり前だと思うのかもしれない（しかし、そうでなかったら大変で、だから「アイデンティティの危機」として、マンガやドラマのテーマによくなるわけだ…）。

このような束縛のないだろう君たちは、自由に自分の道を選ぶことができる。しかも、君たちは日比谷生であり、入試に関してはあらゆる選択が可能として開かれている。もちろん、強烈なオトサン、オカーサンからの要望があるという人もいるだろうが、それだって最終的には自らの強い意志があれば跳ね返すこともできるはずだ。

しかし、その選択の自由さが君たちを揺らすことになる。そういう時こそ、星陵像を思い出そう。「背伸びする」、それが日比谷生の象徴であった（なりけり）。進路こそ「背伸び」して決めるべきものではないだろうか。